

論諸所

藤井 聡

京都大学大学院都市社会学専攻教授

軍隊なんか世界中から無くなければいいし、核兵器も根絶されればいい。国同士がいがみ合うのではなく、すべての国がすべての外国を「友」として「愛」すればいい。世界中の国々の国土は、それぞれの国民が占有するのではなく世界中の人々が仲良く共有すればいい。

外交の局面で「友愛」を掲げ、日本の国土は日本人だけのものではない、と言っている政治家が首相を務める現政権に、刀が一にも政治思想と呼ぶべきようなものがあるとするなら、恐らくはこうした種類のものがある。

もちろん、現政権のみならず歴代の自民党政権においても、こうした考え方が存在していたことは間違いない。そもそも、「第九条」に象徴されるように、我が国の現憲法の思想の重要な柱は、こうしたものだからである。だからこそ、多くの日本人は、昭和の時代ジョン・レンンの「Imagine all the people live in love and peace」(すべての人々が愛と平和の中で暮らして

いる姿を想像して)という舶来の歌を愛していたのである。

とはいえ、実を言つと昭和の日本の大人たちにとっては、こうした「love and peace」の思想は「タチマエ」の議論でしかなかった。

確かに平和がいいし、みんな仲良く差別も何もない方がいいに決まっているとは思いつつ、口先だけでそれだけ言い続けても戦争も差別も無くなりほしくないのだというところは誰もがよく分

理解しながらも、その裏にある人間の闇の部分を描き出すものであった。

「光」と「闇」を飲み込む存在として描かれる「人間」の姿に、昭和の大人たちは心を動かされたのである。そして、闇にはびこる悪に嫌悪を抱きつつも、その闇があるからこそ保守される光があるというこの世の不如意を心と

体で理解するが故に、その闇に対して敬意をすらひそかに抱いていたのである。だからこそ昭和の大人たちは、例

うものである。しかし、現首相が臆面もなく公言する「友愛」の精神には、そうした人間理解における深みというものが一切感じられないのは筆者だけではないだろう。いわば、人間という清濁併せ持つどうしようも無い存在が、無味無臭の「タチマエ」だけで幸せに生きていけるのだという軽薄きまりな

誤解が、その「友愛の精神」なるものの中に明確に胚胎しているのである。そんな誤解をする人間を、我々は少

し前まで「子ども」と呼んで相手にすらしなかったはずである。ところが

人間の光と闇を肯定する精神の力量を持つべし

かっていた。そういう認識が「国民合意」として存在していた時代、それが「昭和」という時代であった。つまり、タチマエとは別に「ホンネ」なるものがあるというところを、口にはせずとも誰もが知っていたのである。

だからこそ、邦画においては任侠映画が、洋画においては例えばマフィアを描いた「ゴッドファーザー」が庶民の人気を博していたのである。それら

の映画はタチマエの重要性を十二分に

えば非核三原則をタチマエで言いながらも核の持ち込みをホンネの中で黙して是認していたのであった。

もちろん、ホンネとタチマエの乖離を手放しで喜ぶわけにはいかない。その両者の矛盾にどのように落とし前を付けつつ、少しでも秩序ある公正で活力ある善き状態をどのように目指していくのか、これこそが人間の生の営みの本質である。それを社会全体で追い求める営みこそが「政治」とい

この平成の日本は、あることかそんな「子ども」を首相にまで任立て上げてしまった。それは無論、有権者の大半が「子ども」化したことの結果である。そうである以上、この深刻な事態を幾ばくかでも改善することを目指すのなら、我こそは有権者なりと傲慢に主張する以前に、一人の円熟した大人たるべくまじめに自らの生を生きることを目指さねばならぬのではなからうか。